様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２５１１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３３３２

研究課題名（和文）世界遺産と防災：アジアにおけるヘリテージツーリズムの持続的発展のために

研究課題名（英文）World Heritage and Disaster Risk Mitigation: For Sustainable Heritage Tourism in Asia

研究代表者
狩野　朋子（KANO, Tomoko）

帝京平成大学・現代ライフ学部・准教授

研究者番号：４０５５２０２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：防災という観点から、日本、インドネシア、中国、トルコの世界遺産を取りあげて、現地調査やワークショップを行ない、アジアにおけるヘリテージツーリズムの持続的発展について検討した。初年度はバリとジョグジャカルタ（インドネシア）、2年目は上海と成都（中国）、3年目はベルガマ（トルコ）でワークショップを実施し、それぞれの地域の問題点を議論し、提言を行った。最終年度のベルガマにおけるワークショップでは防災マップ等の作成を通して地域社会の防災意識を高めた。この過程で、地域の防災委員会の設置に向けた計画書を作成することが取り決められた。これは公共領域における防災研究の構築につながる成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究の成果は、研究期間中に行われた国内外での学会で発表した。これらの研究発表は、当該分野（建築学、文化人類学、観光学等）において大きな学術的意義があるものとして受けとめられた。最終年度に実施したベルガマでのワークショップには地域住民が参加し、そこでは世界遺産をもつ地域社会における防災と防災教育の必要性が強調された。ワークショップの成果はベルガマ市役所ユネスコ課経由でユネスコ本部にも報告されることになっている。これにより世界遺産と防災という課題がグローバルなパースペクティブだけでなく、ローカルなコンテクストにおいても重要であることが示され、大きな社会的意義を有するものであることが確認された。

研究成果の概要（英文）：On the basis of a collaboration between architects and anthropologists, this research focuses on World Heritage Sites in the Asiatic seismic zone, specifically in Japan, Indonesia, China, and Turkey. Issues related to each World Heritage Site and the surrounding area were discussed from the perspective of disaster risk management through field surveys and workshops. These international workshops were held in Bali and Yogyakarta (Indonesia), Shanghai and Chengdu (China), and Bergama (Turkey) over 3 years. Recommendations for sustainable heritage tourism were developed and proposed.
During the workshop with the local community in Bergama, the community's disaster risk awareness was promoted through their discussion and making process of disaster risk management map. Local government began planning a community-based disaster risk management committee as well. These efforts will contribute to enhancing social and community resilience, and developing public disaster risk management studies.

研究分野：建築学

キーワード：世界遺産　防災　ヘリテージツーリズム　持続可能性　ワークショップ　防災計画　防災意識　住民教育

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、世界的に災害が頻発している。2006 年のインドネシア・ジャワ中部地震、2008 年の中国・四川大地震、2010 年のハイチ地震、2011 年の東日本大震災・津波、そして 2015 年のネパール大地震など枚挙にいとまがない。そうしたなかで、世界遺産の被災状況の整理やモニタリングが開始され、日本イコモス（国際記念物遺跡会議）は 2011 年の東日本大震災で被災した文化遺産の修復プロセスをとりまとめている。中国では、中山大学が 2010 年から UNWTO（世界観光機関）の拠点として中国国内の世界遺産をモニタリングしている。また国内では、立命館大学歴史都市防災研究所が、歴史都市の文化遺産を災害から守るために、「文化遺産防災学」を推進している。観光学の分野では、世界遺産は保存と保全が重要な課題であるにもかかわらず、世界遺産と周辺エリアの防災計画は十分に検討されてこなかった。観光地では、発災当日、定住人口の 2 倍から 3 倍におよぶ人々の避難場所の確保と供食が必要になると言われ、国内外からの観光客の避難体制と情報提供体制を整備することが急務とされている。

２．研究の目的

ヘリテージツーリズム、とりわけアジアの世界遺産をめぐる観光に焦点を当てる。世界遺産は人類が共有すべき「顕著で普遍的価値」を持つものとして登録され、「ユネスコ・ブランド」として重要な観光資源にもなっている。その一方で、今日、大地震などにより被災するケースが頻発している。本研究では、建築学と文化人類学の研究者の協働により、防災の視点からアジアの世界遺産の保護と保全を検討し、世界遺産およびその周辺地域の防災計画を提言する。これにより世界遺産とその周辺エリアの防災が、グローバルなパースペクティブだけでなく、ローカルなコンテクストにおいても重要であり、ヘリテージツーリズムの持続的発展にとって喫緊の課題であることを示す。

３．研究の方法

防災という観点から、日本、インドネシア、中国、トルコの世界遺産をめぐるヘリテージツーリズムを取りあげて、現地調査やワークショップを行う。初年度はバリとジョグジャカルタ（インドネシア）、2 年目は上海と成都（中国）、3 年目はベルガマ（トルコ）で実施する。特にベルガマでは、防災関連専門機関、行政、市役所などの異なる機関が抱える防災計画の課題の共有を目的とした専門家会議と住民主体のワークショップを実施する。こうした現地調査やワークショップを通して、世界遺産の保存と活用の手法、またその背景にある理念を理解し、各対象地の防災に対する活動をハード（建造物）およびソフト（コミュニティ）の両面から捉えていく。方法論的には、建築学と文化人類学の手法を統合して用いることで、グローバル、ナショナル、ローカルなパースペクティブにおいて検討する。3 年間で、1）アジアの災害経験と防災に関するローカルな知識の収集、2)ハードとソフト両面からの防災計画の課題発見と提言、3)世界遺産都市の住民を対象とした防災教育とヘリテージツーリズムの持続可能性の追求、の 3 課題をめぐって研究を展開する。

４．研究成果

(1) 現地調査

国内は、（震災後の）熊本（2016 年 7 月）、富士山（2016 年７月）、京都（2016 年 10 月）、長崎・軍艦島（2017 年 7 月）、奈良(2017 年 8 月)、海外は、インドネシア（バリおよびジョクジャカルタ 2017 年 3 月）、ネパール（カトマンドゥ 2017 年 11 月）、中国（上海、成都、麗江 2018 年 3 月）、トルコ（ベルガマ 2019 年 2 月）で、現地調査を実施した。

熊本では、熊本地震（2016 年 4 月）で被災した住宅、仮設住宅、熊本城、復興事務所等を訪

問し、観光資源となり得る歴史的建造物の被災状況を捉えた。また、現地の専門家と日本イコモスメンバー等が、未指定の文化財の保存を検討・実現し、モデルケースとして参照した。

富士山をめぐっては、富士山本宮浅間大社、参宮浅間神社、吉田口五合目、ふじさんミュージアム、御師旧外川家住宅、北口富士浅間神社、世界遺産センター、山中湖を訪れ、世界文化遺産としての富士山と観光の状況を視察した。吉田口五合目は、中国人観光客であふれかえっており、オーバーツーリズムの問題が加速しているという印象を受けた。

京都では、清水寺周辺の清水坂や産寧坂に設置されている「市民消火栓」のプロジェクトについて、大窪健之教授（立命館大学歴史都市防災研究所所長）から研究の経緯をうかがい、益田兼房氏の案内で実態を調べた。本プロジェクトは、世界遺産とその周辺地域を市民の手で守るために、市民の日常的な活動に注目している。ここでは、防災を日常生活のなかの取り組みとすることの重要性が明らかとなった。

長崎・軍艦島では、岡田保良氏のサポートを受け、長崎市役所世界遺産推進室職員の方の案内で軍艦島（端島）の高密度高層アパートや各種施設を視察し、劣化するコンクリートの維持保存と観光資源としての活用方法に関わる課題を共有した。また当時「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として登録を目指していた外海の出津や大野集落等を訪問し、推進室職員や管理者からのヒアリングを通して、現地の取り組みを把握した。

中国四川省では、四川大地震（2008 年 5 月）を契機とした社会の復興と発展が目指され、被災した現場が災害観光の資源として活用されていた。また雲南省では、世界遺産としての麗江古城が居住地から観光地へ転換しながら一定の空間性を維持しているが、このことが防災面で大きな問題を引き起こしていることを明らかにした。

ネパール・カトマンドゥの歴史的地区パタンでは、大窪教授（前述）らがゴルカ地震（2015 年）の発災以前から継続的に実施している住民ワークショップに参加した。ワークショップでは、防災計画と防災マップをいかに住民が主体となって作成するかを拝見し、世界遺産を持つ歴史地区における先進的な活動モデルとして大変参考になった。

（2）ワークショップ

毎年、現地の研究者や専門家とワークショップを実施した。2017 年 3 月には、インドネシアのバリとジョクジャカルタでワークショップを実施した。バリでは世界遺産「バリ州の文化的景観：トリヒタカラナ哲学の具現としてのスバック・システム」を構成する棚田（ジャティルイ村）で現地住民とのミーティングをもち、また文化観光村となったプンリプラン村などを訪問して、文化的景観や伝統住居の観光での活用と実態を調査した。デンパサールにあるウダヤナ大学では、Darma Putra 教授をはじめとする現地の観光研究者とワークショップをもち、世界遺産構成資産をリンクさせた観光ルートの開発プロジェクトを共有した。ジョクジャカルタでは、中部ジャワ地震（2008 年）の爪痕が残る世界遺産ボロブドール寺院やプランバナン寺院等を見学し、ガジャマダ大学観光研究センターでのワークショップでは、センター長の Djoko Wijono 博士らから、ボルブドール寺院の登録（1991 年）後のモニタリング、沿岸部の観光プロジェクトやジョグジャカルタのマスタープランについて、説明を受けた。

2018 年 3 月には、中国の上海および成都でワークショップを実施した。上海では、蘇州のアジア・太平洋地域世界遺産訓練研究センター(WHITRAP: World Heritage Institute of Training and Research for the Asia and the Pacific Region)、世界遺産蘇州庭園（Classic Gardens of Suzhou）、伝統建築保存地区などを訪れたあと、同済大学で遺産建築を専門とする温静助理教授や WHITRAP 上海の研究者たちとワークショップを実施した。成都では、北川の

四川地震遺跡公園、地震博物館、新北川の建築、世界遺産都江堰、震源地・映秀鎮の被災地などを訪れ、劉弘涛副教授の全面的な協力を得て、西南交通大学でワークショップを行った。ここでは、中国の少数民族の集落をいかに保存するかについて、精力的に研究を展開しようとしており、新たな共同研究の可能性も提案された。

（3）専門家会議と住民ワークショップ

2019 年 2 月、トルコ・ベルガマで、世界遺産登録「ペルガモンとその重層的な文化的景観」をとりまとめたベルガマ市役所ユネスコ課の Yaşagül Ekinci 氏の全面的な協力を得て、専門家会議と住民ワークショップを実施した。専門家会議では、地震、火災、水害等を扱う専門家（自治体、NGO、研究者など）から防災計画の内容が報告され、これまで個別に実施されていた防災の取り組みと課題を共有した。さらに、本研究成果であるアジアの災害経験やローカルな防災の知恵を紹介し、防災・減災のための新たな視点を提供した。一方、コミュニティリーダー（観光、教育、地区の代表者等）が参集した住民ワークショップでは、大窪教授らの京都やネパール・パタンでの手法を参考にして、避難ルート、避難生活、文化遺産の保護などについて議論しながら防災マップを作成し、住民の防災意識の高揚につなげた。そこでは世界遺産をもつ地域社会における防災と防災教育の必要性が強調された。この過程で、地域の防災委員会の設置に向けた計画書を作成することが取り決められた。本会議とワークショップの成果は、ベルガマ市役所ユネスコ課を通じて、2019 年末にユネスコ本部に報告される予定である。

(4)研究成果の発表・発信

研究成果は、日本建築学会、日本文化人類学会、総合観光学会、東アジア人類学会、国際観光研究アカデミー隔年次コンファレンス、国際人類学・民族学連合インターコングレス、ヨーロッパアジア観光研究学会、アジア観光研究国際コンファレンス、ヨーロッパ人類学会、ICBR (International Conference on Building Resilience) 等国内外の学会等で発表・発信した（下記学会発表の項目を参照）。また、最終年度のベルガマワークショップでは、世界遺産の防災が、現地の地域社会においていかに重要であるかを示すことができた。こうした住民ワークショップは、ヘリテージツーリズムの持続的発展に向けた取り組みの第一歩である。今後も、地域社会との協働を通して、住民主体で、日常に取り入れられた防災を継続的に検討することが求められる。また、文化人類学ならびに建築学の協働で実施した現地ワークショップは、「防災の公共人類学」を実践していくツールとしても位置づけられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①Shinji Yamashita, Tourism Studies in Japan: Toward the Globalization of Tourism Research, Journal of Global Tourism Research, 3(1), 2018, 3-4

②Shinji Yamashita, Anthropologies of Tourism: A Project Toward a Global Anthropology, American Anthropologist, 119(4) , 2017, 744-747（査読有）DOI: | https://doi.org/10.1111/aman.12959

③Shinji Yamashita, Disaster and Tourism: Emerging Forms of Tourism in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake, Asian Journal of Tourism Research, Vol. 1 (2), 2016, 37-62（査読有）

④Shinji Yamashita, Cultural Tourism, Encyclopedia of Tourism, 2016, 12-214（査読有）DOI: DO10.1007/978-3-319-01669-6_45-1

⑤岩原紘伊、NGOが「翻訳」するコミュニティ・ベースド・ツーリズム ―インドネシア・バリ島におけ

る環境NGOを事例として、アジア太平洋討究、27、2016、241-258（査読有）

〔学会発表〕（計 26 件）

①Megumi Doshita, Shinji Yamashita, Tanaka Takae, Hiroi Iwahara, Momoyo Gota, Tomoko Kano, Reconstruction of cultural heritage: disaster, tourism, and anthropology, 15th EASA Biennial Conference, Stockholm（国際学会）, 2018

②Tomoko Kano, Shinji Yamashita, Momoyo Gota, Megumi Doshita, Takae Tanaka, Hiroi Iwahara, Cultural Resilience for the Future: Heritage Tourism and Disaster Risk Management in Asia, International Conference on Future of the Past: Tourism and Cultural Heritage in Asia 2018, Kyoto（国際学会）, 2018

③田中孝枝・狩野朋子、アジアにおけるヘリテージツーリズムと防災：中国、ネパール、トルコの比較から、総合観光学会第33回全国学術研究大会、2018（下関）

④Tomoko Kano, Momoyo Gota, Takae Tanaka, Social place of Heritage: Disaster risk mitigation plan in Asia, 8th ICBR International Conference of Building Resilience, Portugal（国際学会）, 2018

⑤堂下恵・山下晋司、世界遺産と防災 アジアにおけるヘリテージツーリズムの持続的発展のために、日本文化人類学会第52回研究大会、2018（弘前）

⑥堂下恵、世界文化遺産・富士山をめぐる多様な視座、日本文化人類学会第52回研究大会、2018（弘前）

⑦田中孝枝、地震被害の遺跡化：中国におけるディザスターヘリテージとツーリズム、日本文化人類学会第52回研究大会、2018（弘前）

⑧岩原紘伊、ヘリテージツーリズムと環境問題、日本文化人類学会第52回研究大会、2018（弘前）

⑨狩野朋子、トルコ・ベルガマにおける防災・観光拠点としての水場空間の可能性 ネパールの世界遺産地区パタンに学ぶ、日本文化人類学会第52回研究大会、2018（弘前）

⑩Yuki Kanamori, Momoyo Gota,　Preservation of and Disaster Prevention for Alley Spaces in Kagurazaka District, Tokyo : Analysis of Dead End Street Forms and Accessibility of Surrounding Buildings, ISAIA 2018 The 12th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia（国際学会）, 2018

⑪一色千暁・郷田桃代、京都 四条・東山地域における街路空間構成と歩行者分布の分析－居住者と観光客に着目して－、2018年度日本建築学会大会（東北）、2018

⑫狩野朋子、アジアの世界遺産周辺地域における震災復興と環境移行、2018年度日本建築学会大会（東北）、2018

⑬田中孝枝，世界遺産与防災：亜洲遺産観光的可持続性研究，西南交通大学世界遺産国際研究中心講演会（招待講演）（国際ワークショップ）、2017 （於・西南交通大学（中国四川省））

⑭Tomoko Kano, Shinji Yamashita, Momoyo Gota, Megumi Doshita, Takae Tanaka, Hiroi Iwahara, World Heritage and Tourism in Asia: In Relation to Disaster Risk Management，The 3rd Annual Conference of EATSA - Euro-Asia Tourism Studies Association -，Nara（国際学会），2017

⑮Shinji Yamashita，Intercultural Tourism: A Japanese Perspective，The 3rd Annual Conference of EATSA - Euro-Asia Tourism Studies Association -（招待講演）（国際学会），2017

⑯Shinji Yamashita，World Heritage and Disaster Risk Mitigation: For Sustainable Heritage Tourism in Asia，International Academy for the Study of Tourism Biennial Conference, Guangzhou, China（国際学会），2017

⑰Megumi Doshita，Communal cooperation between local authorities and small businesses in the context of inbound tourism development，A joint CASCA and IUAES conference/intercongres（国際

学会)，2017（於・University of Ottawa）

⑱Takae Tanaka, The process of negotiation and comparison between “ Chinese style ” and “ Japanese style ” in the office: A case study of a Japanese travel company in Guangzhou, China，IUAES Inter congress（国際学会)，2017

⑲田中孝枝、「震災に抗う」というナショナリズム：紅色旅行基地としての震災遺跡公園を事例として、日本文化人類学会第51回大会、2017（於・神戸大学）

⑳岩原紘伊、コミュニティ・ベースト・ツーリズムのローカル化とスピリチュアリティ、日本文化人類学会第51回大会、2017（於・神戸大学）

㉑中村美香・郷田桃代、街路ネットワークに着目した麗江旧市街地の空間特性に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集(建築計画)、 2017（於・広島）

㉒狩野朋子、観光まちづくりの課題と提案　トルコの古都ベルガマを事例として、日本建築学会大会学術講演梗概集（都市計画）選抜梗概オーガナイズドセッション、2016（於・福岡大学）

㉓Shinji Yamashita, Cultural Landscape of the Balinese Subak: World Heritage between Agriculture and Tourism, East Asian Anthropological Association 2016 Meeting in Sapporo（国際学会), 2016

㉔関根卓哉・郷田桃代、木造密集市街地における都市防火の手法の提案：木造・木質建築を許容する更新の可能性、日本建築学会大会学術講演梗概集(建築デザイン)、2016（於・福岡大学）

㉕Megumi Doshita, Multiple understandings and uses of Mount Fuji as a World Heritage site、East Asian Anthropological Association 2016 Meeting in Sapporo（国際学会), 2016

㉖堂下恵、世界遺産・富士山の多様な利用の再考，総合観光学会第31回全国学術研究大会、2016（於・千葉大学）

〔図書〕（計 7 件）

①山下晋司、東京大学出版会、震災復興の公共人類学（共著、関谷雄一・高倉浩樹編)、2019

②白坂蕃・稲垣勉・小沢健市・古賀学・山下晋司編、朝倉出版、観光の事典、2019

③Tomoko Kano, Momoyo Gota, Takae Tanaka, Elsevier, Investing in Disaster Risk Reduction for Resilience, 2019（予定）

④山下晋司、郭海紅編訳、山東大学出版社、民俗、文化的資源化（岩本通弥と共編)、2018

⑤山下晋司、くろしお出版、公共日本語教育学 ： 社会をつくる日本語教育（共著、川上郁夫編)、2017

⑥田中孝枝、風響社、フィールドワーク：中国という現場、人類学という実践（共著、西澤治彦・河合洋尚編)、2017

⑦田中孝枝、ミネルヴァ書房、多文化時代の観光学（共著、高山陽子編)、2017

６．研究組織

(1)研究分担者（研究分担者氏名：ローマ字氏名、所属研究機関名、部局名、職名、研究者番号）

・山下晋司：YAMASHITA Shinji、帝京平成大学、現代ライフ学部、教授、60117728

・郷田桃代：GOTA Momoyo、東京理科大学、工学部建築学科、教授、50242128

・堂下恵：DOSHITA Megumi、多摩大学、グローバルスタディーズ学部、教授、90434464

・田中孝枝：TANAKA Takae、多摩大学、グローバルスタディーズ学部、専任講師、50751319

・岩原紘伊：IWAHARA Hiroi、東洋大学、アジア文化研究所、客員研究員、80757419

(2)研究協力者（研究協力者氏名:ローマ字氏名）

ノエル・サラザール：SALAZAR Noel、椎木直恵：SHIIGI Naoe、益田兼房：MASUDA Kanefusa、西村幸夫：NISHIMURA Yukio、三浦恵子：MIURA Keiko、林勲：HAYASHI Isao、永吉守：NAGAYOSHI Mamoru、大谷順子：OTANI Junko、高欣：GAO Xin、大窪健之：OKUBO Takeyuki、矢野和之：YANO Kazuyuki、岡田保良：OKADA Yasuyoshi